

# アフガニスタン・ペーパーズ

The Afghanistan Papers

隠蔽された真実、欺かれた勝利

クレイグ・ウィットロック 著

岩波書店 3960円

評・森本 あんり (神学者  
東京女子大学長)

アメリカの壮大な失敗の記録である。だが同時に、国家の失敗をここまで公に議論できることに、なお残る民主社会の希望も感じられる。九・一一のテロ攻撃を受けたアメリカは、報復と称してアフガニスタンへ侵攻し、あっけなくタリバーン政権を崩壊させる。しかし、タリバーンはアル・カイダを匿(かくま)っただけで本来は別組織だし、一般のアフガン人とタリバーンは区別がつかない。アメリカは、誰を相手にしているかもわからずに、もぬけの殻となった国で二〇年を戦い続け、出口戦略もないままに七十七万人を派兵して一兆ドルを費やした。空白を埋めるはずの新国家建設は、文化の無理

## 米、出口なき派兵の失敗



◇Craig Whitlock＝紙リ3  
ワシントン・ポスト記者。ピュニタ  
調査報道記者。最終選考され  
ツア一賞最終選考され  
度ノミネート

解と傲慢(ごうまん)が災いして次々と暗礁に乗り上げる。

しかも、ブッシュ・オバマ・トランプという三人の大統領は、「勝てない戦争」と知りながら、大本営発表よろしくバラ色の見通しを語って国民を騙(だま)し続け、撤退を約束しつつ増派を重ねた。その詳細な記録の存在を嗅(か)ぎつけたのが、本書のワシントン・ポスト記者である。

題名や序文からして一九七一年の「ペンタゴン・ペーパーズ」が意識されていることは明らかだが、両者の違いも大きい。五十年前の事件では、政府内の機密文書が持ち出され、新聞社は記事差し止めを求める政府に訴えられたが、今回は機密指定のない公開文書が発端で、新聞社は背後に山積するインタビューやメモの開示を求めて連邦政府を訴えた側である。半世紀の間に進んだ情報公開法の成果といってよい。

ふりかえれば、わが国では政府内文書の隠蔽(かくま)や破棄が平然と行われ、国会もそれを追及できずにいる現状である。実は、本書の長い謝辞にも連邦議会の議員は誰一人出てこない。だとしたら、国民の知る権利を支えるのは誰か。「記者は上司が守ってくれないかぎり、困難な記事に取り組むことはできない」という一言を、ジャーナリズム界の責任ある立場の方々に、しかと受け止めていただきたい。河野純治訳。